

<抜刷り>

富士見市立資料館調査研究報告

第2号

富士見市立考古館開館50周年記念号

2024.12.28

埼玉県 富士見市立資料館

講演記録	荒井幹夫	無我夢中 - 考古館創成期 -
講演記録	会田明	市民の好奇心が考古館を変えた
回想	和田雅子	とにかく熱かった
論文	和田晋治	縄文中期勝坂式期の猪装飾付土器
論文	早坂廣人	花積下層～関山式土器について
事例報告	駒木敦子	公民館で「社会教育施設の専門職」について考えた
研究ノート	山野健一	石鳥居が伝える江戸と鶴馬の結びつき
研究ノート	田ノ上和宏	入間ごぼうに関する調査と考察
★資料紹介	佐藤一也	上内手遺跡第10地点出土の陶磁器
資料紹介	高橋宏之	南通遺跡出土の下小野系土器について
資料紹介	大野朝日	新田遺跡第1号住居跡について
資料紹介	齋藤麻那	打越遺跡出土の押出型石匙について
資料紹介	菅沼慎太郎	南通遺跡近世墓坑と出土銭貨

※1 本文中の執筆者の肩書きは2024年3月31日時点です

※2 見開きの左側に偶数ページがくると見やすいように編集しています
両面印刷する場合はこのページごと印刷することをおすすめします
2ページずつ印刷する場合はこのページを飛ばして印刷してください

※3 抜刷り共通の表紙です。該当する記事に★を付けています

<資料紹介>

上内手遺跡第 10 地点出土の陶磁器

佐藤一也（難波田城資料館）

1) 上内手遺跡第 10 地点の調査概要

1. 遺跡の立地と環境

上内手遺跡は、市域北部の大字上南畑^{かみなんばた}に位置し、荒川低地の沖積地内を南北に流れる新河岸川^{しんがし}によって形成された自然堤防上に位置している。この自然堤防上には遺跡が他にも確認され、新河岸川を挟んだ対岸には、弥生時代や古墳時代、平安時代の複合遺跡で富士見市とふじみ野市にまたがる伊佐島遺跡^{いさしま}が立地する。

上内手遺跡では、これまでの発掘調査で弥生時代後期～古墳時代前期を中心とした集落跡や奈良・平安時代の集落跡とともに、江戸時代後半期の屋敷跡に伴うと考えられる遺構群が確認されている。特に遺跡北部に位置する第 2・3 地点の溝跡や井戸跡からは、18 世紀後半～ 19 世紀前半頃の肥前産の筒型碗^{つづがたわん}やくらわんか碗、中皿、瀬戸・美濃産の小坏^{しょうはい}等が数多く出土しており、注目される（早坂 1997, 1998）。

上内手遺跡周辺に目を向けると、隣接した新河岸川の対岸には伊佐島遺跡の他に、江戸時代中期より新河岸川の舟運で使われた伊佐島河岸^{いさしまがし}や蛇木河岸^{へびぎ}があった。新河岸川舟運は江戸時代以降、江戸と川越を結んで物資を運搬した流通の要であり、新河岸川周辺に物資の流通が想定される（実松 1994、山野 2023）。発掘調査成果により、江戸時代後期を中心とした陶磁器流通の実態に迫ることができる。

本稿で述べる第 10 地点は遺跡最南部に位置し、現在の新河岸川堤防に沿った北西-南東に長い調査範囲で、約 6000 m²とこれまでの調査地点の中で一番広い面積である。本稿では第 10 地点の報告書（佐藤 2021）で、時間の制約で報告できなかった江戸時代の土坑出土陶磁器について、追加報告するものである。

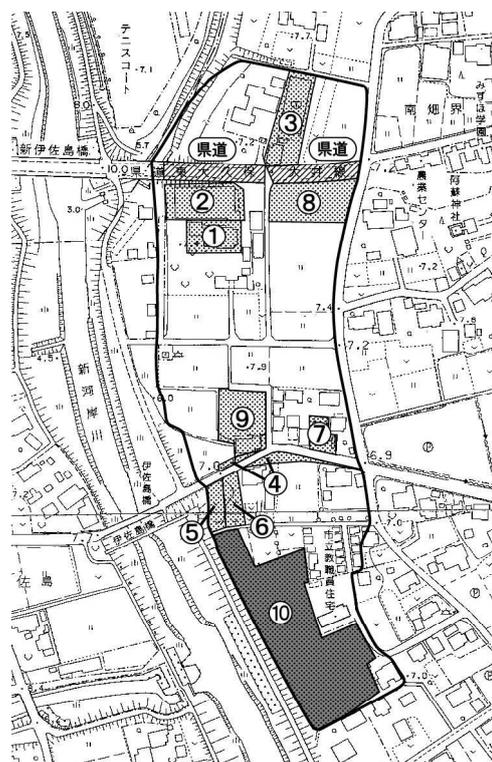


図 1 上内手遺跡第 10 地点位置図

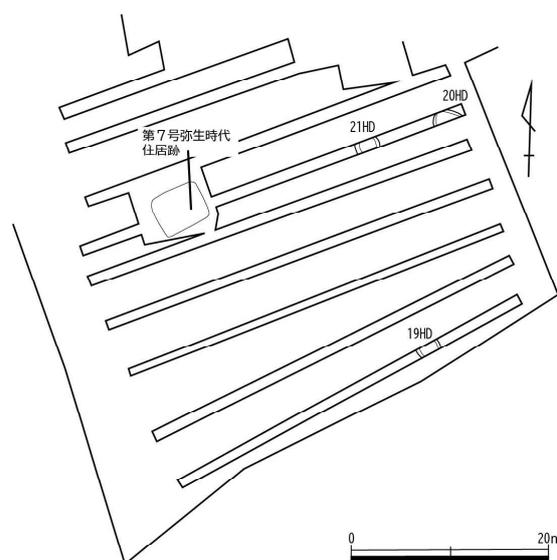


図 2 上内手遺跡第 10 地点南部遺構配置図

2. 確認された遺構

第10地点で確認された主な遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期の^{たてあな}竪穴住居跡16軒、方形周溝墓1基、平安時代以降の^{ほったてばしら}掘立柱建物跡2棟、井戸跡6基などである。また、江戸時代の墓坑1基や江戸時代以降と考えられる溝跡11条も確認され、墓坑からは寛永通宝の古銭のほか、完形のかわらけ2点や骨片が出土している。確認された溝跡11条の中には、遺構の重複状況から墓坑より古い江戸時代の溝跡も検出され、第2・3地点と同様に当地点にも江戸時代における人々の生活の痕跡が確認されている。

3. 第19～21号土坑

第10地点で確認された江戸時代の遺構として、他に3基の土坑が挙げられる。第19～21号土坑(19～21HD)は、調査区南部に位置する。調査時間が足りなかったため、試掘調査におけるトレンチ部分のみであったが、多くの江戸時代後期の陶磁器片・土器片が覆土中から出土しており、18世紀後半～19世紀前半の廃棄土坑群と考えられる。3基の土坑は狭い範囲内で検出されており、周辺に江戸時代後期の屋敷等の人々の生活の場があったものと考えられる。

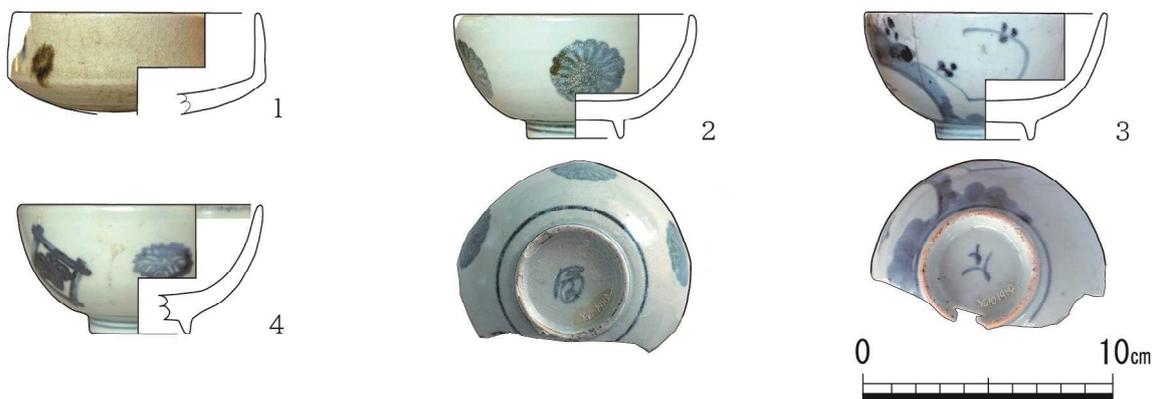


図3 第19号土坑(19HD)出土陶磁器実測図

No.	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	釉薬	産地、技法・文様
1	陶器 せんじ碗	9.5	—	(4.0)	灰釉	京・信楽産または瀬戸・美濃産、呉須絵、鉄絵
2	磁器 中碗	9.7	3.7	5.2	透明釉	肥前産、コンニャク判による菊花文、底部渦福
3	磁器 中碗	9.7	3.8	5.1	透明釉	肥前産、雪輪梅樹文、底部崩れ大明年製か
4	磁器 中碗	9.8	4.0	5.2	透明釉	肥前産、コンニャク判による井桁に菊花文または蔦文

表1 第19号土坑(19HD)出土陶磁器観察表

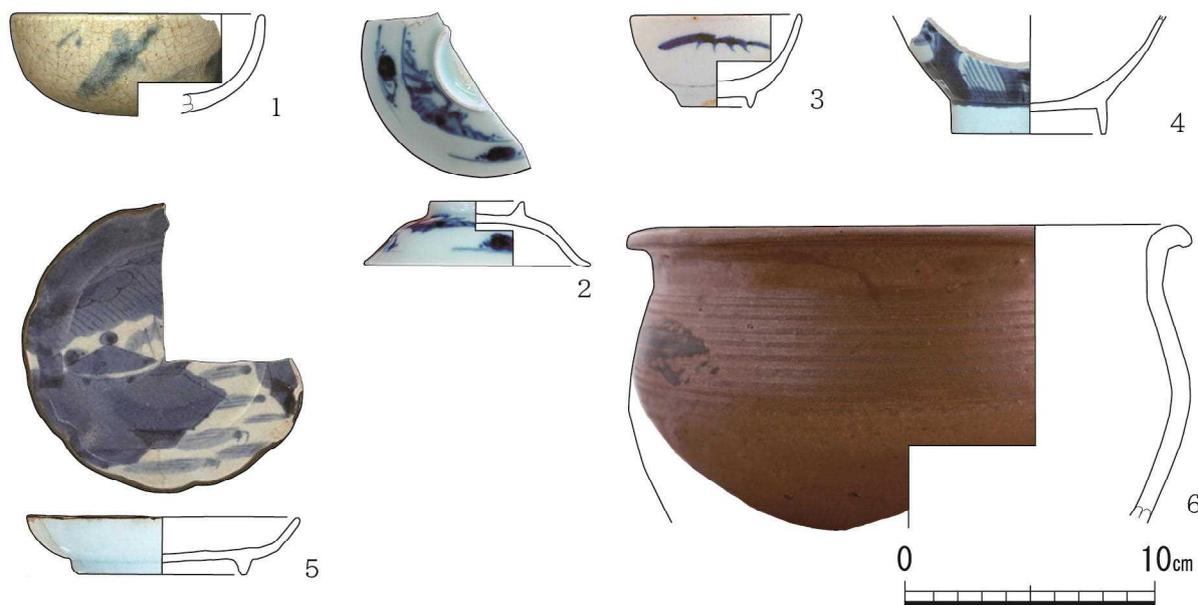


図4 第20号土坑(20HD)出土陶磁器実測図

No.	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	釉薬	産地、技法・文様
1	陶器 中碗	10.2	—	(4.0)	灰釉	瀬戸・美濃産、呉須絵
2	磁器 碗蓋	9.2	—	2.6	透明釉	瀬戸・美濃産、文様不明
3	磁器 小坏	6.9	3.0	3.7	透明釉	瀬戸・美濃産、笹文
4	磁器 中碗	—	6.1	(3.9)	透明釉	肥前産、文様不明
5	磁器 小皿	11.0	6.7	2.3	透明釉	瀬戸・美濃産か、口鏝 山水文か
6	陶器 中甕	22.1	—	(11.4)	鉄釉 (柿釉)	瀬戸・美濃産、鉄釉(黒釉)流し掛け

表2 第20号土坑(20HD)出土陶磁器観察表

2) 出土陶磁器について

ここからは確認された土坑から出土した陶磁器について、紹介する。なお、近世陶磁器の年代や産地、技法や文様等については、これまでに多くの発掘調査が行われ、研究が進んでいる江戸遺跡の発掘調査報告書（別記参考文献）を参照した。

1. 第19号土坑出土の陶磁器

1は陶器で、腰折形のいわゆる「せんじ碗」である。2～4は、肥前産のいわゆる「くらわんか碗」で、2・4の外面にはコンニャク判による文様が押印されている。

本跡の年代は、出土陶磁器からおよそ18世

紀後半と考えられる。

2. 第20号土坑出土の陶磁器

1は呉須絵で文様が描かれた陶器碗である。2は磁器の碗蓋、3は磁器の小坏で、それぞれ瀬戸・美濃産と考えられる。4はいわゆる「^{かんどん}広東碗」の体部下半から底部の破片で、肥前産と考えられる。5は口縁部が輪花形の磁器小皿で、口唇部は口鏝を施している。6は中形の甕で、瀬戸・美濃産と考えられる。

本跡の年代は、出土陶磁器からおよそ19世紀前半と考えられる。

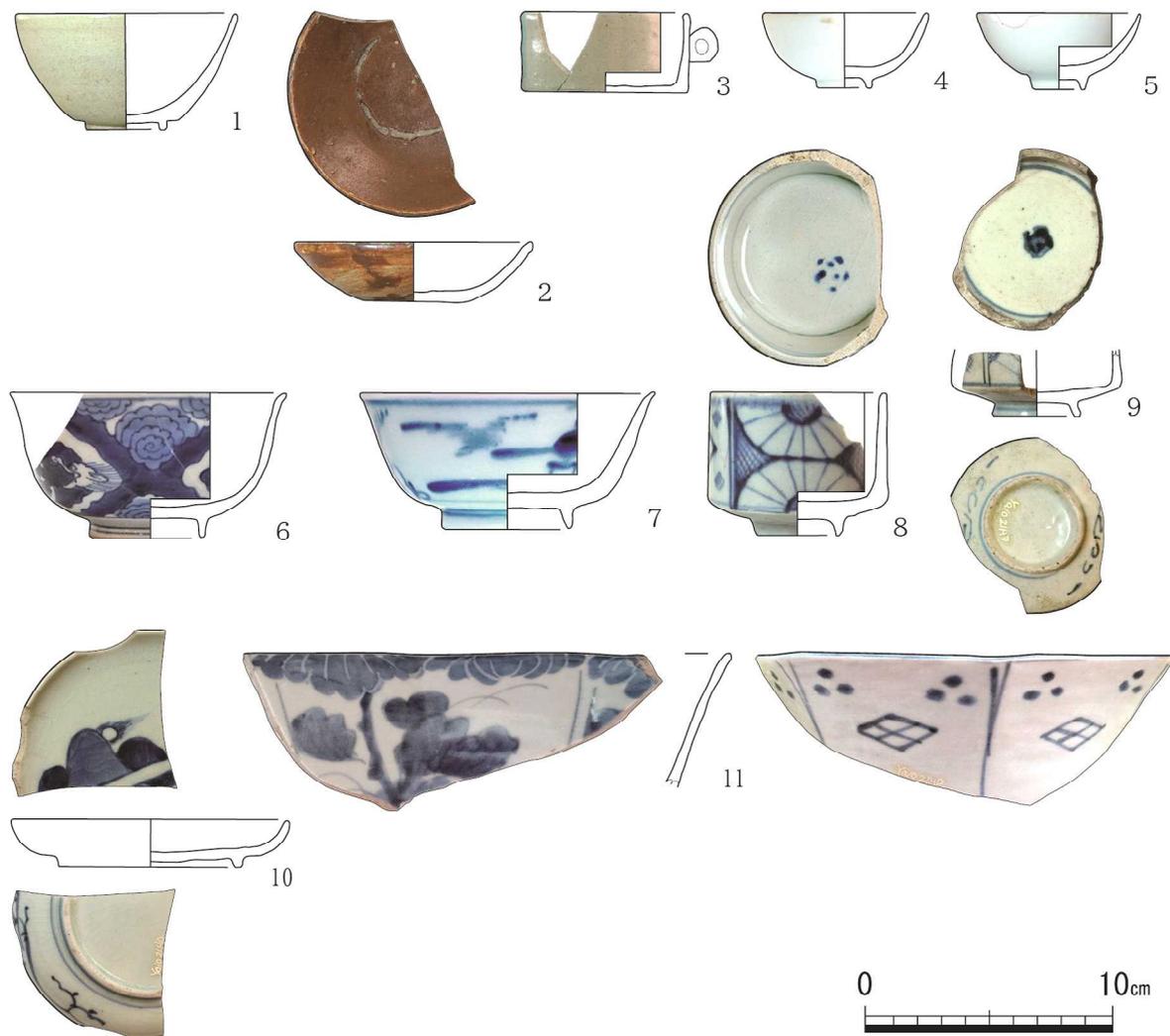


図5 第21号土坑(21HD)出土陶磁器実測図

No.	器種	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	釉薬	産地、技法・文様
1	陶器 小杉碗	9.9	3.4	4.7	灰釉	京・信楽産
2	陶器 灯明受皿	9.6	4.4	2.4	鉄釉	瀬戸・美濃産、受部欠損
3	陶器 鳥餌入れ	6.8	6.8	2.3	灰釉	瀬戸・美濃産、環摘み貼付、底部回転ヘラ削り調整
4	磁器 小坏	6.8	2.2	3.1	透明釉	瀬戸・美濃産か、文様なし
5	磁器 小坏	6.6	1.6	3.1	透明釉	瀬戸・美濃産か、文様なし
6	磁器 中碗	11.1	4.6	5.9	透明釉	瀬戸・美濃産、雲龍文
7	磁器 中碗	11.9	5.2	5.5	透明釉	瀬戸・美濃産、山水文
8	磁器 筒形碗	7.2	3.6	5.8	透明釉	瀬戸・美濃産、斜め格子、菊花散らし、菱文、梅花文
9	磁器 筒形碗	—	3.6	(2.7)	透明釉	肥前産、斜め格子、菊花散らし
10	磁器 小皿	11.2	7.4	1.9	透明釉	肥前産、山水文か、唐草文
11	磁器 八角鉢か	—	—	(5.5)	透明釉	肥前産、内面墨弾き、外面四菱文

表3 第21号土坑(21HD)出土陶磁器観察表

3. 第 21 号土坑出土の陶磁器

1 は、京・信楽産^{しがらき}と考えられる小杉碗である。
 2 は瀬戸・美濃産^{とうみょう}の灯明受皿で、受部が欠損している。3 は鳥餌入れで、底部は無釉で回転ヘラ削り調整の痕跡が確認できる。4・5 は磁器の小坏で、染付文様は確認できない。5 は 4 に比べ、口縁部の厚さが薄くシャープである。6・7 は端反形^{はぞり}の磁器碗で、6 の外面には雲と龍が描かれる雲龍文^{うんりゅう}が施され、清朝磁器の影響を受けた文様構成と思われる。8・9 は磁器の筒形碗で、8 は瀬戸・美濃産、9 は肥前産と考えられる。それぞれの外面には、菊花散らし^{きつかけ}文様を主とした構成が展開される。10 は肥前産の磁器小皿である。11 は肥前産磁器の八角鉢と考えられる。内面の草花の文様のうち、口縁直下の花卉の境界は、墨弾き^{すみはじ}と思われる技法で表現している。墨弾きとは、最初に白抜きにしたい部分を墨で描き、その上に呉須で文様を描いてから焼成すると、墨の部分が焼け飛んで白抜きになるという技法である。

本跡の年代は、出土陶磁器からおおよそ 19 世紀前半と考えられる。

3) まとめ

今回確認された江戸時代の土坑 3 基は、トレンチ内でのみの調査で完掘していないため、全数の把握にはならないが、各土坑の陶磁器について表で整理した。なお、出土した陶磁器片は図化できる大きさのものが大半で、小片はわずかに出土するのみであった。

18 世紀後半の第 19 号土坑では、年代の物差しとなる肥前産の「くらわんか碗」が一番多く出土したのに対し、19 世紀前半の第 20・21 号土坑でのくらわんか碗は 1 点のみで、19 世紀の特徴である広東碗や端反碗が器種構成に追加されている。また、第 20・21 号土坑の磁器は瀬戸・美濃産が中心となり、江戸遺跡（別記参考文献）で確認される磁器の産地変化と変わらない。新河岸川周辺の流通も、18 世紀に多く流通していた肥前産磁器が 19 世紀になると瀬戸・美濃産磁器中心に移った様相を捉えることができる。また、陶器は、陶器産地として地理的に近い瀬戸・美濃産陶器が 18 世紀代から流通の中心で、19 世紀以降も変わらず多くの陶器が上内手遺跡を含む新河岸川周辺に流通したとみられる。

第 19 号土坑 (19HD)				第 20 号土坑 (20HD)				第 21 号土坑 (21HD)				
年代：18 世紀後半				年代：19 世紀前半				年代：19 世紀前半				
陶器	せんじ碗	京・信楽系または瀬戸・美濃産	1	陶器	中碗	瀬戸・美濃産	1	陶器	小杉碗	京・信楽産	1	
	中皿	瀬戸・美濃産	1		中甕	瀬戸・美濃産	1		鳥餌入れ	瀬戸・美濃産	1	
	播鉢	瀬戸・美濃産	1		磁器	小坏	瀬戸・美濃産		1	灯明受皿	瀬戸・美濃産	1
	不明	瀬戸・美濃産	1		器	広東碗	肥前産		1	小坏	瀬戸・美濃産	2
磁器	小碗	肥前産	1		小皿	瀬戸・美濃産	1	磁器	くらわんか碗	肥前産	1	
	くらわんか碗	肥前産	3		碗蓋	瀬戸・美濃産	1	器	端反碗	瀬戸・美濃産	2	
									筒型碗	肥前産	1	
										瀬戸・美濃産	1	
									小皿	肥前産	1	
									御神酒徳利	肥前産	1	
									八角鉢	肥前産	1	

表 4 第 19～21 号土坑(19～21HD)出土陶磁器一覧

引用・参考文献(発行順)

- 実松幸男 1994「新河岸川舟運と村々」『富士見市史 通史編 上巻』, 669-684
- 早坂廣人 1997『上内手遺跡第2地点』富士見市遺跡調査会調査報告(47), 14-17
- 早坂廣人 1998『上内手遺跡第3地点』富士見市遺跡調査会調査報告(50), 12-19
- 佐藤一也 2021『上内手遺跡第10地点』富士見市遺跡調査会調査報告(77), 1-2
- 山野健一 2023「新河岸川舟運」『新版 富士見のあゆみ』, 128-129
- <以下、江戸遺跡と総称される、旧江戸地域の調査報告書>
- 鈴木裕子 1995『伝中・上富士前I』, 豊島区埋蔵文化財調査報告(6)
- 玉口時雄ほか 1996『汐留遺跡』汐留遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書
- 橋口定志ほか 2000『東池袋I』豊島区埋蔵文化財調査報告(13)
- 高山優ほか 2005『芝田町五丁目町屋跡遺跡発掘調査報告書』港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書(38)
- 豊島区遺跡調査会 2007『巢鴨町IX』豊島区埋蔵文化財調査報告(23)
- 豊島区遺跡調査会 2009『巢鴨町XII』豊島区埋蔵文化財調査報告(26)
- 高山優 2014『石見津和野藩亀井家屋敷跡遺跡発掘調査報告書III』港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書(57)
- 山崎吉弘 2016『伝中・上富士前VIII』豊島区埋蔵文化財調査報告(49)
- 岡本康則 2017『豊前小倉新田藩小笠原家屋敷跡遺跡・港区No. 170 遺跡発掘調査報告書』港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書(65)
- 野村満ほか 2020『麻布田嶋町町屋跡遺跡』港区内近世都市江戸関連遺跡発掘調査報告書(79)
- 豊島区遺跡調査会 2021『染井32』としま遺跡調査会調査報告(18)